

## ティーチング・ポートフォリオ

長崎 靖子

(記入日：2021年 9月2日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

日本語学(1) (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、日本語の歴史(1) (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、文章表現法 (日本文化学科前期選択必修科目 2単位)、日本語教育演習 (日本文化学科前期選択必修科目 2単位) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

私の教育理念・目標は、学生が母国語である日本語の音声・文字・語彙・文法等に関する基本的な知識を学ぶことにより、日本語を、国語教育的立場とともに、日本語教育の立場から捉えることができるような視点を養い、日本語に対する興味を深めることである。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

今回は文章表現法に関し述べていく。文章表現法は、中学校、高等学校の国語科教員免許に必須の科目である。授業では、中学校・高等学校の教科書に即し、単元の「書くこと」に特化した内容で授業を進めている。教職を目指す学生のための授業であるため、「自己紹介文」「説明文」「創作文を作る」「本を紹介する」等、教科書の単元を自らが実践することで、授業方法を学べるように心がけている。

コロナの影響で、今年度の前期授業 10 回分はオンラインとなった。創作文は対面の場合、グループを作りリレー形式で物語を完成させる方法をとっている。これまでは3人一組で「起承転結」の「承」「転」「結」の部分を順に書くという方法をとっていたが、今回はオンライン授業の中で、チャットに添付させる形で、各々が「承」「転」「結」をリレー形式で作るという試みを行った。オンライン上でリレー文を作るのは初めての方法であり、学生の中には添付ファイルで送れないというトラブルもあったが、全体としてはスムーズに作業を進めることができた。それぞれに完成させた創作文は、創作文集として履修者に送り、それぞれの評価をオンライン授業の中で発表した。本の紹介文としてポップ作りは、対面で行うことができたため、授業内でポップを作り、全体で評価を行ったのち、大学図書館で展示を行うことで、成果発表という場を設けた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

「創作文を作る」授業は、今回オンライン上で行った。先に述べたように全体としてはスムーズに行うことができたと考える。今後オンライン授業の場合、さらにスムーズに作業が進められるように改善していきたい（エビデンス1）。

「本の紹介をする」授業では、紹介文には個性的な内容が多く、事前にポップを作るために読書活動を行うという学修成果が確認できた。さらに大学図書館と提携しポップの展示を行ったことは、今後、学生が教員になった際、地域の書店と提携した授業の一つの指針を示すことになると思う。（エビデンス2）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

中学校、高等学校の単元にある授業科目をさらに加えるとともに、オンラインでの授業も考え、さらに改善を行っていきたいと考えている。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 課題ペーパー（非公開）
- 2 テキスト 半沢幹一他『ことば遊びの日本語表現』おうふう 2008
- 3 参考図書 中学校・高等学校国語教科書

# ティーチング・ポートフォリオ

岩崎 利彦

(記入日：2021年09月1日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

スポーツ(2) スポーツ (8)

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生がスポーツの楽しさを体感するとともに、自身の身体組成に興味を持ち、生化学的根拠を理解し、知識を身につけるとともに、自身の身体で実践することで、継続的に QOL 向上に取り組む態度を身にけること。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

なにより「スポーツ・身体運動の楽しさ」を体感できるよう「身体を動かすこと」「走ること」の「楽しさ」「爽快感」を実践において経験できるようにした。

スポーツ文化的側面を理解してもらえるように、「遊びのルール化」「オリンピック」などの話しを交え、メディアで見るものと自身が行うスポーツの繋がりも理解できるように工夫した。

また、人生 100 年時代を理解し、健康的な身体を手に入れることは、QOL の向上に不可欠であることを解説しつつ、そのためのトレーニング (身体づくり) 方法を、科学的根拠と指標を提示しながら、学生個々にあった負荷で体力づくりが行えるようにした。

2020 年度よりコロナ禍の影響により、オンラインで授業を行うことが主となっているが、このような時期こそ、「スポーツ・身体運動」が、免疫力向上にも、ストレス発散にも効果があることを理解してもらえるよう、1 人暮らしの部屋で 4～5 分で行える、トレーニング動画を作成し、提供する等の工夫をした。

## 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

オンライン授業では、行える運動にも制約があり、学生の反応も捉え難い。授業が進みにつれ、他授業のオンラインの疲れなどから、身体をほぐす、運動不足を解消する、などの目的ももった学生が前向きにトライしているようには感じた。

## 5 今後の目標 (これからどうするか)

オンラインでも「スポーツ・身体運動の楽しさ」を伝える工夫

「体力づくり」への積極的参加へのさらなる工夫

## 6 エビデンスとなるもの (資料の種類などの名称)

配布資料 運動時の心拍数の変化 (非公開)

クーパーテスト (非公開)

# ティーチング・ポートフォリオ

眞田 尊光

(記入日：2022年2月13日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

基礎ゼミナール〈1年必修科目2単位〉、日本文化入門(2)〈1年必修科目2単位〉、プレゼミナール〈2年必修科目2単位〉、日本の絵画〈2年～4年選択必修科目2単位〉、日本の仏像〈2年～4年選択必修科目2単位〉、文化財の保護と修復(1)・(2)〈2年～4年選択必修科目2単位〉、日本文化専門演習V(1)・(2)〈3年選択必修科目2単位〉、文献演習(1)・(2)〈4年必修科目2単位〉、日本美術史(2年～4年選択科目2単位)など

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

日本の美術作品および有形文化財について、その特徴やその背景にある歴史を学ぶことを通じて、教養を深めるとともに、人間の文化の多様性を把握し、他者を尊重して共存し互いに貢献する意識を身につけることを目指している。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本美術関連の科目(日本の美術(1)・(2)、日本の絵画、日本の仏像)では、学生が作品や文化財を観察して理解する際に、デジタル画像・映像の利用だけでなく、絵画・彫刻・工芸品の実物や複製品を教室に持ち込み、学生がそれらを直に触れて学べる機会を設けている。また、同様に実物を観察する機会として博物館・美術館や寺社等での見学授業も実施している(今年度は東京国立博物館、成田山新勝寺等を見学)。

さらに、日本の伝統的な画題や意匠を深く理解するため、製品のデザイン案を提出させ、外部業者の協力を得て製品化するというアクティブラーニングも試みている(今年度は日本の美術(1)で「ふせん」を作成)。

文化財関連の科目では、地域における文化財の保護の実態を知るために現地でのフィールドワークを行うとともに(今年度は我孫子市と取手市の文化財施設を見学)、有形文化財(掛軸・卷子・茶道具等)の取り扱い方について実物資料を用いて実践的な指導を行っている。

## 4 成果 (どうだったか：結果と評価)

日本美術関連の授業では、初回授業内で簡単なアンケートを行い、各授業で取り扱う分野について学生がどの程度の前提知識を持っているか測っているが、最終回での試験やレポートの解答と比較すると、受講した学生の日本美術への理解が確実に深まっていることを読み取れる(エビデンス1)。

3年生の専門演習や4年生の卒業論文においては、全員ではないが、学生が自身の研究対象とした作品を美術館等で実物を丹念に観察し、そのうえで独自の意見をまとめていることを確認できた(エビデンス2)。

日本の美術（1）では、日本の伝統的意匠を参考にした学生のデザイン案をもとに、外部業者に委託して「ふせん」を作成し、学科内外に頒布した（エビデンス3）。我孫子市や取手市の文化財見学で学んだことをもとにした、文化財保存のあり方をまとめたレポートを確認することができた（エビデンス4）。

なお、授業内容をその時々 SNS 等で話題になっている展覧会や作者・作品と絡めることは、言うまでもなく学生の興味関心を刺激し自主的な学修へと発展させやすいが、このことを今年度は葛飾北斎で再認識した。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

今年度も前期・後期ともにリモートと対面の形式が混合したが、リモートの場合は画像や映像を各自のデバイスを用いて手元で見ると、対面形式における大教室の大画面モニターよりも作品理解が深まる場合が多いことが分かった。この点、学内での iPad 普及率の上昇にあわせて、大画面モニターと iPad の併用を考えている。ただし大教室で併用する場合は iPad をこちらの指示通りに使用しているかの確認が重要である。

また、学生が授業時間外に美術品や文化財に接する機会として展覧会や公開情報を積極的に紹介し、その機会を学生が楽しみながらも学修に結び付くようにしていきたい。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 今年度に学生が提出した試験答案とレポート（非公開）
- 2 今年度に学生が提出した卒業論文及び専門演習での発表（非公開）
- 3 ふせん（日本文化学科学生研究室にて公開・配布）

\* これまでに学生案をもとに製作した作品は下記の URL 参照。

<https://www.kgwu.ac.jp/2021/09/24/%e5%ad%a6%e7%a7%91%e3%81%ae%e6%96%b0%e3%82%b0%e3%83%83%e3%82%ba%e7%b4%b9%e4%bb%8b/>

- 4 今年度に学生が発表したプレゼンテーション（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

伊藤 純

(記入日：2021年 9月2日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

日本文化学科専門科目では「日本文化入門（1）」「日本の伝統芸能（1）（2）」「日本の民話・神話（1）（2）」「日本の宗教と思想（1）（2）」「日本の祭りと儀礼」「日本風俗史」「日本文化専門演習VI（1）（2）」「文献演習（1）（2）」、共通教育科目では「民俗学」「文化人類学」を担当している。大学院では「文化人類学特論Ⅰ・Ⅱ」を担当している。

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

学生の関心や問題意識を尊重しながら、学生自ら課題を設定し、課題に対する適切な方法論を用いることができる人材を育成することが教育目標である。特に文化を取り扱う領域のため、学生が民俗学・文化人類学の知識、方法、視座を学ぶことにより、自文化および異文化、さらに自己および他者に対する理解を深めることを目指している。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「日本文化入門（1）」をはじめとする講義科目では、写真や動画を使ったスライドを積極的に利用し、初学者でも授業内容を理解できるように工夫した。フォローアップとしてリアクションペーパーを配布し、質問があったときは、次週で回答した。「日本の伝統芸能」では、WEBで閲覧できる専門的な情報（「国指定文化財等データベース」「e 国宝」などの専門的なページや関連する動画、クラウド上の資料など）に授業時間外でもアクセスしやすいよう QR コードを利用した。

演習科目では、図書館のグループ学習室を利用したライブラリワークや巡見や現地調査などフィールドワークを取り入れて、学生自ら必要な資料や文献を収集できるように指導した。

遠隔授業においては Teams をプラットフォームにして、オンデマンドまたはリアルタイムの授業を行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

「日本文化入門（1）」では、読解が難しい用語やテキスト内の不十分な説明に対しても、写真や動画などを補助的に使用した結果、自らの経験に引きつけて理解していることが確認できた（エビデンス1）。「日本の伝統芸能」では動画閲覧により、伝統芸能への関心が高まった（エビデンス1）。日本文化専門演習（1）（2）においては、学生自ら発表に必要な文献や資料の収集ができるようになり、学生相互で討議ができるようになった（エビデンス2）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

事前・事後学習を促すために、基礎文献のリストを事前に配布し、読解のためのアドバイスをを行う。また、学修の成果をみるレポートの機会を増やす。

エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- 1 リアクションペーパー（非公開）、レポート（非公開）
- 2 授業配布物 大学配布のアカウントの OneDrive に保管（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

日本文化学科 千野裕子

(記入日：令和4年2月16日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

古典文学概論 (選択必修科目 1~2 年前期)、古典文学講義 (選択必修科目 1~2 年後期)、日本文学史 (古典) (選択必修科目 1~2 年前期)、日本文学と女性 (古典) (選択必修科目 2~3 年前期)、王朝の文化と文学 (必修選択科目 2~3 年後期)、日本文化専門演習Ⅱ (古典文学) (選択必修科目 3 年前後期)、文献演習 (必修科目 4 年前後期)、文学 (共通教育科目 1~2 年前期) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

学生が日本古典文学に関する知識と理解を深め、自らの力で作品の解釈を行うことができるようになることにより、自身とは異なる価値観を認め理解するための深い思考力を身につけること。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

令和3年度は対面授業を主としつつも、部分的に遠隔授業が実施されたため、次のように取り組んだ。

[対面授業の場合]

全ての講義科目でリアクションペーパーとして **Microsoft Forms** を活用した。**Teams** の課題機能で配信し、作品内容に関する受講生の解釈を書かせ、それに対して丁寧にフィードバックを行った。

日本文化専門演習と文献演習では、作品理解を深めるための議論を重視し、それを行いやすくするために、連絡の補助手段と **Teams** を利用し、授業外でも学生が積極的に質問や意見を伝えられるようにした。

資料収集能力を身につけるため、日本文化専門演習ではパソコンやスマートフォンを実際に利用させ、各種データベースの検索方法を指導した。

[遠隔授業の場合]

いくつかの授業で部分的に遠隔授業となることがあった。授業のレジюме (pdf) と説明のための音声 (MP3) を用意し、**Microsoft Teams** で配信した。



学生への連絡・指示等はチームのチャットを用い、質問に対応できるようにした。リアクションペーパーは Microsoft Forms と Teams の課題機能を用い、作品内容に関する受講生の解釈を書かせるようにし、フィードバックを行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

古典文学概論・日本文学史（古典）・日本文学と女性（古典）・王朝の文化と文学では、回を追うごとに多角的な作品の見方をするような受講生が増えた。（エビデンス2）。

日本文化専門演習の受講生は自らの力で先行研究をはじめとする資料を収集することができるようになっている（エビデンス1）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

演習科目だけでなく講義科目でもレポート課題に関する基礎的指導を行っていきたい。データベース利用などの資料収集の実践を試みる機会を増やすとともに、その際に必ず気をつけるべき研究倫理に関する指導を行う。レポートの形式そのものに問題がある学生もいるので、word の使用方法についても確認していききたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 授業のレジュメ（非公開）
2. リアクションペーパー（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

学科：日本文化 氏名：山名 順子

(記入日：2022年 2月 23日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

近代文学概論 (選択必修科目 1~2 年前期)、近代文学講義 (選択必修科目 1~2 年後期)、日本文学史 (近現代) (選択必修科目 1~2 年後期)、日本文学と女性 (近代) (選択必修科目 2~3 年前期)、基礎ゼミナール (必修 1 年前期)、日本文化専門演習Ⅲ (近代文学) (選択必修科目 3 年前後期)、日本語と表現(1) (共通教育科目 1~4 年)、文章表現法 (共通教育科目 1~4 年)、国語科教育法Ⅲ,Ⅳ (教職に関する科目 3 年前後期) など

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

自らの関心や問題意識に沿って課題を設定し、適切な方法論にもとづいて解決することのできる人材の育成を教育目標とする。

具体的には日本近代文学に関する知識と理解を深めながら個別の作品の解釈を行うことを通じて、日本の言語文化・言語芸術の持つ魅力や価値を理解するとともに、多様な価値観や現代とは異なる文化への関心や視座を深化させ、他者への理解や社会奉仕の意識をもつことを目指している。

共通教育科目では、実践的な学びを通して日本語の適切な使用法を身につけるとともに、日常的に日本語への興味や関心をもち、修得した事項を社会生活のなかで活かすことのできる人材への第一階梯となることを目指している。

また、国語科教育法の授業を通じて、大学での学びを教育の現場で実践し、良識ある情報発信や社会奉仕を志す人材の育成を目指している。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

日本近代文学に関わる授業では、毎回リアクションペーパーあるいは teams の課題フォームで授業に関する質疑や感想、授業の中で紹介した作品に関するコメントを書かせ、次回の授業開始時にフィードバックを行った。

基礎ゼミナールでは、日本文化に関わる研究の基盤を整えるため、授業外でも随時質問を受け付けながらプレゼンテーションを完成させることを心掛けた。

また、日本文化専門演習では、近代文学研究のための工具書や ICT の活用法、方法論など作品理解のための議論や受講生相互の作業を重視し、teams を通じて授業の内外で受講生と積極的に交流を行えるよう工夫した。また、授業内で論文データベースの利用法に習熟させ、必要な資料は教員の助力のもと収集を行うなど、コロナ禍の中でも行える資料収集および選択・分析の実践に努めた。

教職に関わる授業では、複数教員による授業分担を想定したグループワークを行い、一つの教材の多角的な分析・理解や、受講生による議論・評価の機会をつくるよう工夫した。模擬授業ではオンラインツールや ICT の有効活用に焦点をあてた。模擬授業はオンラインのものすべてと希望のあったものについて録画し、次年度の教育実習時に参考資料とするため、各受講生が自分の授業動画にアクセスすることのできる環境を調えた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

日本近代文学に関わる授業では、回を重ねるにつれて自覚的かつ多様な作品分析を行える受講生が増加した。（エビデンス 1）。

基礎／プレゼминаールの受講生は、自力で先行研究収集を行うことができるようになり、プレゼンテーション資料をまとめることができた（エビデンス 2）。

日本文化専門演習の受講生は、文献の選択・収集・分析を通じて各人の興味に従った先行研究のまとめや研究目的の設置、仮説論証にむけた作業を積極的に行った。内容には個人差があるが、5 回の資料収集の中で卒論の方向性を徐々に明らかにするなど各受講生が目標に向けて努力した（エビデンス 2）。

教職に関わる授業では、受講生が相互批評の内容を交換することを通して成果の確認と内容の改善を行うことができ、前期から後期への模擬授業動画で成果が確認できた（エビデンス 3）。また、評価シートは許可を得て実名入りで共有し、現場で必須の〈評価〉活動への自覚の育成を試みた（エビデンス 4）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

受講生の能力を伸ばすため、teams を利用した緊密な質疑応答やフィードバックの機会を重視し、現時点ではやや低調な事前・事後学修へのサポートを充実したい。

国語科教育法Ⅲ、Ⅳでは、近年の人数急増に伴う各履修生の持ち時間の急減が大きな課題となった。課外での学習支援や teams 等のツールを活用し、履修生

の不安・不満の解消に努めたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. リアクションペーパー／teams の感想フォーム（非公開）
2. 各受講生の作成した発表用資料（非公開）
3. 模擬授業動画（非公開）
4. 各受講生による模擬授業評価表（非公開）